

すずめの巣

小川未明

青空文庫

ある日のことです。孝吉が、へやで雑誌を読んで、夢中になっていると、

「孝吉は、いないか。」と、おじいさんの呼ばれる声がしました。いつもとちがつて、なんだか怒っているようです。

「はてな、どうしたんだろう。なんにもしかられる覚えはないのに。」と、孝吉は、思いました。

「はい。」と、返事をして、おじいさんのそばへきました。

「おまえは、私の大事にしているらの鉢を倒したろう。」と、眼鏡越しにじつと顔をにらんでおっしゃいました。孝吉は、知らないことですから、

「らの鉢？」と、答えました。

「知らないことがあるものか。おまえよりするものがない。」と、おじいさんは、あくまで孝吉がしたと思っていられます。

「あれほど、植木台へ上つてはいけないというのに、いつもあすこへいって、おまえはいたずらをしている。」

孝吉は、よく屋根の植木を並べてある台の上へ出ます。なぜなら、あすこはよく日が

あたつてあたたかであるし、また遠方の景色が見えて、なんとなく気分が晴れ晴れするからでした。けれど、おじいさんの大事にしている植木鉢などに一度だつてさわったことはありません

「僕、ほんとうに知りませんよ。」

「おまえは、昨日であつたか、あすこへ出てなにかしていたらう。」と、おじいさんはおつしやいました。

「昨日？」と、孝吉は、考えました。ああそうだった。もう春がやってくるのだと思つて南の方の空をながめていると、うす桃色の雲がたなびいており、そして、その下の方に、学校の大きなかしの木の頭が、こんもりとして見えたのでありました。

「重ちゃん、ここから、学校のかしの木の頭が見えるよ。」と、ちようど外に遊んでいた重ちゃんに知らせました。

「ほんとう？」

「だが、うそをいうものか。」

「僕も上つて見ていい？」と、重ちゃんがいったから、孝吉は、おじいさんに、植木台へお友だちを乗せてもいいかと聞くと、おじいさんは、らんや、おもとが並べてある

し、ぼたんのつぼみにでもさわるといけなからと、お許しにならなかったのです。

「重ちゃん、原っぱへいつて、ボールを投げて遊ぼうよ。」と、しかたがないから、下を向いていったのです。

「ああ、そのほうがおもしろいや。早く孝ちゃん、いらつしやいよ。」と、重ちゃんは、いいました。それから、二人は、原っぱで、ボールを投げて遊んだのでした。ただそれぎりであつて、自分は、植木になどさわらなかつたのでした。

「きてごらん。」と、いわれるので、おじいさんについて屋根へ出てみると、なるほど、らんの砂や土がこぼれて、あたりにちらばっています。

「おかしいね。」と、孝吉も、頭を傾けました。お母さんでなし、お姉さんでなし、だれだろう？

「べつに、鉢をころがしたのでもないな。」と、おじいさんは、らんの鉢を手に取り上げていられました。

「おまえが、棒でもふりまわして、その先が当たつたのだろう。」

「僕、なんで棒など振りまわすものか。」

「いや、だれでもいい。こんどしたら、おじいさんは許さないよ。」と、新しい土を、ら

んの鉢はちに入れていられました。

翌朝よくあさでした。まだうす暗くらいうちから、屋根やねですずめがチュン、チュン、鳴ないていました。

「そうだ、すずめかしらん。」と、孝吉こうきちは、思おもったので、そつと床とこから起おき出でて、雨戸あまどを開あけて見みたが、もうすずめの姿すがたは、見みえませんでした。

その後、だいぶたつてからです。学がっこう校の運動場うんどうじょうで、孝吉こうきちや、ほかの子供こどもたちは、あの大おおきななしの木きの下したに立たつて、話はなしをしていました。

「この木きは、いくつくらい、ボールを食たべたろうね。」

「僕ぼくたちの、投なげたのだけでも、三つくらい食たべているよ。」

枝葉えだはがしげつていて、この木きの中なかへ投なげ込まれたボールは、どこかに引ひつかかるとみえて、それぎり、下したへ落おちてこなかったのです。そして、孝吉こうきちが、屋根やねの植木台うえきだいから見みたのは、この木きの頂いただきでありました。それが、春はるになって、葉はが変かわつたらしく、だいぶ枝葉えだはの間あいだがすいて見みられたのです。

「あつ、あすこに、ボールがのつかっている。」と、一人ひとりが指さすと、

「あすこにも、黒くろいものがある。あれもそうらしいね。」と、またほかの一人ひとりが、いいま

した。

「よし、僕、登のぼっていつて取とろうや。」と、勇ゆう敢かんで、元げん氣きで、木き登のぼりの上じょう手ずな小お田だが、
かしの木きに上のぼりはじめました。小お田だは、下したの太ふとい枝えだに乗のつたとき、

「おい、だれか、棒ぼうを持もつてきてくれよ。」と、叫さけびました。孝こう吉きちはすぐ走はしつていつて、
小こ使つかい室しつのそばに立たてかけてあつた竹たけざおを持もつてくると、小お田だは、それを木きの上うへから受う
け取とつて、

「いいかい。落おとすよ。」といつて、一つ、二つ、三つとボールを落おとしました。

「こんど、すずめの巢すを落おとすよ。」といいました。

「えつ、すずめの巢す？」と、みんなは、上うへを見みていると小お田だは、さおを伸のばして、頂いただき
にまるるいてる丸まるいものを突つき落おとしました。

「わあつ。」と、いこう声こえがしました。しかし、もう小こすずめは、巢す立だつていませんでした。
「なんだ、水みずごけがで出でてきたぞ。」

孝こう吉きちは、おじいさんが、らんの根ね本もとに巻まいておいた水みずごけだと、すぐわかりました。
りこうなすずめはやわらかな水みずごけの上うへへ卵たまごを産うんで、育そだてたのでありました。はじめて、
いつかのなぞが解とけたけれど、孝こう吉きちは、すずめをにくむ氣きになれなかつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

※表題は底本では、「すずめの巣《す》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すずめの巣

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>